

第40回地盤工学会を終えて

河 邑 眞 (かわむら まこと)

(社)地盤工学会 調査・研究部長, 豊橋技術科学大学教授 工学部

第40回地盤工学会は、2005年7月5日から7月8日にかけて、函館市において開催されました。開催期間中の天候は生憎の雨で、戸外では少し肌寒く感じられるほどでしたが、函館ホテルをはじめとした4施設、13会場で熱気のこもる研究発表と討論が行われました。研究発表会への参加者は2111名に及び、技術展示には38団体からの参加を得ました。また、交流会には350名が参加いただくとともに、見学会には3日間で78名が参加されました。参加者数は、ここ10年ほど同じ水準を維持しており、会員数の減少とともに学会活動の縮小が懸念されるなか、研究発表会が盛大に行われておりますことはご同慶の至りです。これもひとえに、研究活動を活発に行われている会員諸兄、ならびに研究発表会、技術展示、講演会、交流会、見学会などの開催・運営に多大な御尽力をいただいた実行委員会の皆様をはじめとする関係各位のご協力の賜物であり、深く感謝申し上げます。

本年の函館大会では、1360件を越える多数の発表がありました。研究発表プログラムを用いて研究分野を整理した結果を表1に紹介いたします。この表には、関連するディスカッションセッションでの発表件数も含めております。2から5といった、地盤の材料特性や地盤の挙動の解明という、どちらかというと基礎的な研究分野では、661件の発表がありました。また、1、および6から8といった、構造物の設計法や防災・環境の問題に対する技術の開発という、どちらかというと応用的な研究分野では、698件の発表がありました。安全、安心といった社会的な要請にこたえるべく、応用的な研究の発表のウエイトがやや大きくなってはいますが、基礎、応用の両面から多くの研究が発表されました。

函館大会におけるディスカッションセッションでは、弾性波速度の測定方法、コーン貫入試験結果の利用、都市地盤情報の整備など、地域防災問題などを対象として、原地盤における、より信頼できる情報を獲得するための調査・試験方法についての研究分野や、離散体や多相体といった精密なモデルを用いて、地盤の複雑な現象を解明しようとする研究分野などが取りあげられ、研究の動向の紹介と討議が行われました。

また、函館大会では、2003年十勝沖地震地盤災害、平成16年新潟・福井・四国・関西豪雨災害、新潟県中越・福岡県西方沖地震など、頻発する最近の災害についてのセッションが設けられ、多くの被害事例、分析結果

表1 研究分野別発表件数

研究分野	発表件数
1 一般	10
2 調査・分類	107
3 地盤材料	302
4 地盤挙動	196
5 地盤中の物質移動	56
6 地盤と構造物	380
7 地盤防災	193
8 地盤環境	115

についての報告があり、貴重な情報の発信・交換が行われました。さらに、ディスカッションセッションでは、新たな技術者像を求めて、男女共同参画時代の地盤工学、地盤工学における継続教育などのテーマについての討議も行われました。

函館大会では、技術者交流特別セッションを初めて導入しました。このセッションでは、安全・安心・情報をキーワードとして、地盤工学と境界領域を共有する、日本緑化工学会、地域安全学会、日本情報地質学会の3学会を招待し、その学会の研究活動について紹介いただくとともに、情報交換による関連学会との連携を図ることを目標としました。定員150名の会場は、ほぼ満席で、境界領域における専門知識の必要性を感じている会員の関心の強さが伺われました。ゼロからのスタートで準備委員会の多大の努力により企画・実行されたセッションでしたが、好評でしたので、来年度も開催すべく準備を進めています。

さらに、函館大会では、次代を担う若手研究者の優秀な研究成果を称え、さらなる研究の向上を図っていただくため、優秀論文発表者賞をはじめ設けました。29歳以下の若手発表者のうち、本年は117名の方を選考しました。受賞者を学会のホームページ、「土と基礎」に掲載するとともに、受賞者には賞状をお贈りしております。

以上、函館大会での研究発表の動向、新たな取り組みなどについて報告いたしました。来年度の研究発表会は鹿児島で開催されます。より多くの会員諸兄が参加され、研究発表会を通して、研究活動、参加者相互の情報交換を促進していただきますようお願い申し上げます。

(原稿受理 2005.9.6)